

ほんのひととき

宮尾美明

また春がやってきた。去年の出来事が蘇ってくる。心の準備は出来ている。たかが虫、たかが蝶、そう思うのならたかが人間と言えるかも知れない。だから自然は自然のままに。生き物の生き方のままに。人が手を加えてはいけけないのだ。

去年の春のある日、私はとんでもないことをやってしまったことに気がついた。誰でも分かりそうなことなのにまるで気がつかなかった。その時まで。

ドキリとした。まさかと思った。なぜ今まで気がつかなかったんだろう。蝶の幼虫がああ味の悪い毛虫だったなんて。

春先植えたパンジーとビオラが思いも寄らない素晴らしい開花を見せた。

「一体どうやったたらこんなに見事に咲くんですか？」

いろんな見知らぬ人から声をかけられて少々鼻が高かった。もともと、格別何か苦労したというのではなかったから、多分

「うちの苗はいいよ」

苗を買ったおじさんの言葉通りだったのかも知れない。それにしても見事だった。百万の顔が一斉に同じ方向を見て風に揺れている様は一日見ても飽きないし、心が豊かになった。五十ばかりある鉢のどれもがそれぞれの表情で春を謳歌していた。蝶や虫が毎日のように訪れ、そこはかとなく漂う可憐な花の香りに吸い寄せられていた。

切り戻し

あまりの美しさに花を枯らしたくないと思っていて私の前にネットでの文字が躍った。もう一度花を蘇らせて初夏の庭をパンジーで埋め尽くしましょう、そのタイトルの如くネットの中では切り戻されたビオラやパンジーが見事に蘇っ

ていく写真が写し出されていた。

早速同じようにやってみた。半信半疑のその記事の如く見事に花が蘇っていく様子には感動した。愛しい子供のように毎日パンジーやビオラを眺めていた。

そんなある日、私は蘇ったパンジーが勢いをなくして弱っているのを発見した。見事な花をつけている株が、わずかな日数で元気を失っていた。初めは水切れかと思った。次いで肥料不足かとも思った。

原因は毛虫だった。よく見る青虫ではなく、見たこともなかった気味の悪い黒と黄と赤の毛虫。真っ黒いトゲを全身に立てて、うねうねと体をくゆらして私のパンジーやビオラをむしゃむしゃ食べているのを見て怒りがこみ上げてきた。初めは気味が悪いので、虫除けスプレーを使ったが、虫とともに花も枯れてしまった。仕方なく私は虫を見つけるやいなや片っ端から摘んで、車の通る路に投げ捨てた。朝起きてこのいやな仕事に取りかからなければならぬ運命を怨んだ。虫と私の格闘は連日続いた。毛虫は日毎大きくなり、その毒々しい赤と黒と黄色の見るからに派手な体が動くたびに、代わりに誰もやってくれないことを怨みながら続いた。

多分、私の方が勝ったかもしれない。毛虫はぐんと少なくなり、花は見事に咲き誇ってきたからだ。

そんなある日、久しぶりに巨大化した毛虫が、石塀をよじ登っていくのが見えた。思わず摘んで道に捨てた。あれだけ採ったのにまだ残っているなんて。そんな気持ちだった。

次の朝、またしても同じように毛虫は塀を登り初めた。ついと手を伸ばそうとして私ははっとした。動きを止めた毛虫の先に、一つのさなぎが出来ていた。

そうなんだ！毛虫は蝶の子供なのだ。知っていたのにそれまで全く気がつかなかった。私は急に胸が痛くなった。一生懸命花を食べて大きくなり、やがてさなぎになるという前に、命を奪われた。慌てて探したが、さなぎはたったの二つしかなかった。一つは大きいさなぎで、もう一つは小さかった。多分、私が薬をかけたせいかもしれないと悔やんだ。

さなぎは一週間経っても二週間経っても変化はなかった。さなぎになる力がやっとなかったんだろう。蝶になれなかった幼虫とさなぎのまままで終わってしまった

った蝶に、ごめんねごめんねと何度も謝った。

ある朝、犬の散歩に出ようとして、何気なく見たら、何とさなぎからくちやくちやの羽が出てきた。慌てて小さい方のさなぎを見たが変化はなかった。

散歩から帰ってはやる胸を抑えさなぎを見ると、蝶が濡れた羽を伸ばそうとしていた。さらに、小さいさなぎまで殻を割って縮んだ羽を見せていた。頑張っ！思わず声が出た。それから時々蝶の様子を見に行った。大きいさなぎの方の蝶は、見事な色合いの羽を伸ばしじっとしていた。何という美しさだろう、あの不気味な幼虫の色は、宝石の輝きのような美しさが変わっていた。と、二時間が過ぎた頃、羽がゆっくりと呼吸をするように開いて伸びて縮んで開いて。そんな動作を何度も繰り返したあと、真っ青な空にふわっと舞い上がり、また舞い戻った。まるで生まれ故郷を記憶に刻み込もうとしているようだった。

そしてついに、小さいさなぎの蝶も、縮んだ羽を伸ばしたあと、ゆっくりと開いた。呼吸しているかのように閉じてまた開いて、そしてついに空に舞い上がった。ひらひらと過酷な運命を乗り越えて二匹の蝶は羽を開いて飛んでいった。

今年も春がやってきた。庭には今を盛りとパンジーの花が同じ方向に百万にも思える花を風に揺らしている。今年は寒くまだ蝶の姿は勿論、幼虫らしき姿にも出会っていない。

蝶もパンジーも私も同じ地球にほんのひととき同じ時を過ごさせていただいているのだ。